

フェルマーの最終定理 サイモン・シン

看護学部看護学科助手 岩澤 敦史(2021.2.1)

恥ずかしながら、読書の楽しさに気づいたのはここ最近の話である。ずっとスポーツに勤しんできた私は勉強と趣味の両立に忙しく、なかなか読書に時間を割くことがなかった。2020年1月にCOVID-19の1人目の感染者が発覚してから、現在1年以上経つが、感染拡大の猛威は凄まじく、日々の生活に現在も制限が必要である。そのような中、オンラインで買い物を楽しんでいる時に、パッと目を奪われたのがこの本である。

皆さんは「ピタゴラスの定理」をご存じだろうか。義務教育で数学の授業で習う公式の一つであったと記憶している。直角三角形の一辺の長さを知ってどうするんだ、平方根なんて日々の生活に使わない、と思った人も少ないないだろう。私自身も数学者ではないし、ピタゴラスの定理に感銘を受けた感受性豊かな学生ではなかった。

そんな私が、この本を読もうと思ったのも今思えば少し不思議である。出版も決して最近のものではない。2000年に出版された本である。ベストセラーというのは、やはり理由があって売れているのだと改めて感じた一冊であった。

「フェルマーの最終定理」って何だっけ？という人もいるかもしれない。文字にすれば非常に簡単だ。『3以上の自然数 n について、 $x^n+y^n=z^n$ となる自然数の組 (x, y, z) は存在しない』たったこれだけである。ただこれを証明するという事は、生半可なことではない。証明までの経緯を実際に調べてみると数学的に何が起きているのかは全く分からない。しかし、この本は素人が読んでもわかるように表現されており、ほとんど数字は出てこない。数学の予備知識がなくても楽しく読むことができるというのが、この本の魅力の一つではないかといえる。

「フェルマーの最終定理」の起源をたどれば古代ギリシャにさかのぼる。手に取った人は分かると思うが、歴史をさかのぼってみると「 $x^2+y^2=z^2$ 」というピタゴラスの定理が事の発端である。そこから「フェルマーの最終定理」へと発展したのだが、100年、200年経っても誰もわからず、300年を超えてやっと証明されたという話である。フェルマーの部屋には、後に「フェルマーの最終定理」と名前が付く式の証明をしたとされるメモが残っていたが「この余白はそれを書くには狭すぎる」と記載し、この証明を残すことなく亡くなってしまった。

この本には「フェルマーの最終定理」と人類がどのように戦ってきたのか、フェルマーの最終定理が解けるまでといった300年を超える壮大なヒストリーが描かれている。数学における英傑とも呼ばれる人たちがこのたった一つの難問に挑むも次々と敗れ去った、そんな「知」を求め続けた人々のドラマが描かれている。そしてこの証明までの過程には数人の日本人も多大な貢献をしている。ちなみに私と同じ名字である「岩澤理論」というものが途中に出てくるが、その部分では私自身も物語に参加しているような気分になった。

読書をすることで、そこには今まで知らなかった新たな出会いがある。私の知らない世界で数学はこのような歴史があって発展してきたという事実を知った時の高揚感は今でも忘れられない。数学のみならず、【勉強する】ことの楽しさや【学ぶ】ことの重要性を改めて考えさせられる。そんな本であった。そこには数学という学問や概念に情熱をもって接する人や、分かりやすく説明をしてくれる著者や制作にかかわる人たちがいるおかげでもあるといえる。読書に馴染みのない人もぜひこのような出会いをしてほしいと心から思う。

【ご紹介の本】

『フェルマーの最終定理—ピュタゴラスに始まり、ワイルズが証明するまで』

サイモン・シン 著 青木薫訳

新潮社 2000.1



※文庫本も出版されています。

『フェルマーの最終定理』（新潮文庫）サイモン・シン 著 青木薫訳 新潮社 2006.6

現在当館に所蔵はありませんので、最寄りの公共図書館等をご利用下さい。